

わが国では近年、少子高齢化、長引く国の財政逼迫、大学に求められる社会からの人材育成ニーズの高度化、など様々な変化が見られ、これらを背景として、国立大学の構造改革と法人化が議論された。そして、国立大学は、平成 16 年 4 月に国立大学法人法に基づく法人として再出発の転機を迎えた。

これにより、職員の身分の変更（非公務員へ移行）、組織運営と運営資源の管理・運用に対するアカウンタビリティ（事業計画作成とその業績評価、財務諸表の作成、及び社会への開示義務）や自主的・自律的組織運営が原則となり、従来よりもシビアな運営・経営環境に身を置くこととなった。

国から学長へは大幅な裁量権移譲が行われ、教育、研究、組織運営等における自由裁量度が拡大する反面、自己管理能力の向上と厳格化が要求されることとなる。また、少子高齢化現象は将来的な定員確保の問題を深刻化させており、学生を顧客として、より高付加価値の教育サービスを提供するという概念が定着しつつある。

国立大学を取り巻く社会の大きな変化の中にあっては、学長、事務局など統括管理者だけではなく大学理念の実践者である各学部一体で自治的施策を策定していくことが重要であると考えられる。一方、国外に目を転じ、文部科学省の資料で自治的に運営されている国立大学をもつ国を見ると、フランスが挙げられる。（ドイツも同じく自治権を有すると記載されているがこれは州立大学である）

パリ市内と近郊には、パリ大学という総称で多くの大学が点在しており、それぞれ、パリ大学Ⅰ、パリ大学Ⅱ、などと共通の呼称で呼ばれており、大学は各々自治権が与えられている。

そこで、某国立大学法人からの依頼を受けて 10 月 28 日（木）と 29 日（金）にパリ大学を視察した。その一部をレポートする。

■ パリ大学第Ⅲ、第Ⅳ ソルボンヌ大学

パリの中心に位置するカルチェ・ラタンは、800 年の歴史をもつソルボンヌを中心とした学生街として有名であり、ソルボンヌ大学はこのカルチェ・ラタン中心地である。現在、ソルボンヌ大学と呼称されているのは、パリ大学第Ⅲ（Sorbonne Nouvelle）と第Ⅳの 2 つを指している。ソルボンヌ大学が有する学部は、凡そ以下のとおりである

フランス文学と比較文学、フランス語圏研究国際センター、フランス語、ラテン語、ギリシャ語、哲学、社会学、歴史、アラブ・ヘブライ研究、地理学と国土開発、芸術と考古学、英語、ゲルマン研究（ドイツ語、オランダ語、イデッシュ語、スカンジナビア研究、ヨーロッパ研究）、イベリアとラテンアメリカ研究、カタルニア研究、イタリアとルーマニア、スラブ研究、応用外国語、音楽と音楽学、応用人文科学、情報コミュニケーション学院、体育、スポーツ、近代西洋文化研究

ソルボンヌ大学の建物の外観は、貴族の邸宅のような重厚で装飾にとんだ造りをしており、アーチ型の優雅な窓の中にはシャンデリアの灯りが煌々とともっている



ソルボンヌ大学の建物は、ソウフロット通り（Rue Soufflot）の突き当たりのパンテオンや、手の込んだ装飾の建物とデザイン的に協調しあい、街全体に溶け込んでいる

学生が勉学に励む学舎というよりは、歴史のあるホテルか高級なアパルトマンのようである

パリには、一戸建ての家はなく皆大きな古い建物 immeuble、maison の各階にあるアパルトマンに住んでいる

これらの重厚な古い住宅施設と大学の建物とが、喧嘩することなく景観に収まり、よいたたずまいを感じさせている 大学と街とが共に歴史を重ねる、非常に印象深い眺めである



一点注意を引いたのは、通用口を含む全ての出入口で、入館する学生や職員に対して、警備員が学生証や職員用のパスをチェックし厳重な入館検査を行っていたことである。搬入口のような小さな入口の内側にも警備員が立っている。イラク派兵に伴う世界的なテロ不安の一端が大学にまで影をおとしているかのようである。

サンジャック通りから建物に沿って巡り、学生通り（Rue Des Ecole）の交差点からソルボンヌ大学を振り返ると、この建物全体のもつ優雅な雰囲気が街並みに溶け込んでいる様子が伺える。ヨーロッパでは、18世紀以降に登場した国家的な大学の多くが、バロック的な宮殿形式を採用しているそうである。手の込んだ装飾を施した建物は、永い年月をかけて街の一部となり、教学の殿堂に相応しい歴史と風格とを漂わせている

■ パリ大学 第Ⅴ

サンミッシェル大通りとサンジャーマン（Bd. St Germain）の交差点をメトロのオデオン駅の方へ向かうと、通り沿いにパリ大学第Ⅴが見えてくる。パリ大学第Ⅴは、同じパリ大学区の中にいくつか校舎を持っており、ここでは医学、歯学、心理、等の学部を有しているソルボンヌ大学とは違い、この大学に出入する学生の姿はみられなかった

■ パリ大学第Ⅱ パンテオン・アサス

サンミッシェル大通りをリュクサンブール宮殿（公園）沿いに、ポールロワイヤル駅（Port Royal）方面へ下り、アサス通りへ向かうアサス通りに近づくにつれ人通りはまばらになり、大学が休暇中であるからか、平日であるにもかかわらず、ソルボンヌ地区に比べ活気のない見劣りのする街並みとなる

パリ大学第二のオパンテオン・アサスは、他の大学の建物と違い近代建築である。他の大学を眺めた後では、あまりにも建物がシンプルで歴史的な文化的な臭いが薄いように感じられる。エントランスは大きくガラス張りになっており、2階に昇る階段が外から見て取れる。建物の中には灯りがともり、職員や学生の影が見られる

■ パリ大学 第Ⅴ（薬学部）

メトロのポールロワイヤル（Port Royal）駅のそばのパリ大学第Ⅴは薬学部である。パンテオン・アサスの校舎前からアサス通りを後戻りしマルコポーロ公園に向かって右折すると、左の一角にパリ大学第Ⅴの学舎が見えてくる。この大学の周辺一帯にも、教学施設が多く立ち並んでいる

例えば、パリ大学第Ⅴ（薬学部）のある区画の丁度 反対側、Rue August Comte という通りや、サンミッシェル大通りをはさんだ先にも高校（lycee Montaigne、lycee Lavicier）、国立高等化学学校（Ecole Nationale Supérieure de chimie）等、いくつもの学校がある。フランスでは、1960年の大学改革で、約90あまりある国立大学が、分野的に同じ傾向を持つ学科ごとに13のグループに分割され、高等教育の拡充により、フランスの大学はマンモス化した。学生の急増に大学施設の規模拡大が追いつくまでのことであろうが、キャンパスは狭く、潤いが無く、文化性、芸術性が薄く・・・と酷評されることもあったようである。

